

NPO JCP NEWS

No. 25 · 2012. 5.25

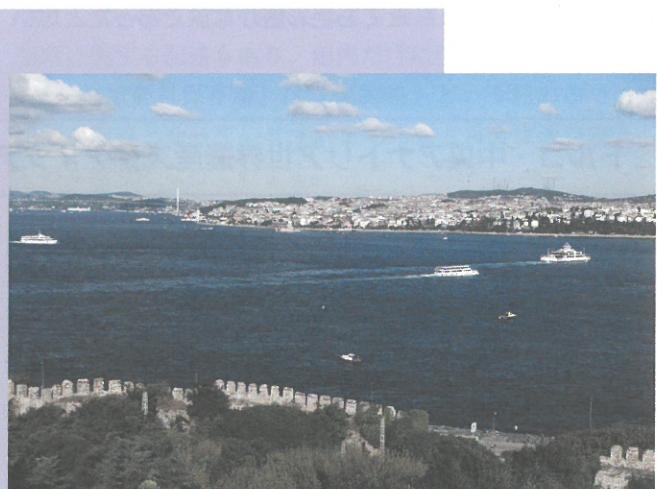
- ・ トルコ・中央アナトリア世界遺産スタディツアーリポート
- ・ 「轍」 保存修復の現場から アナトリア考古学研究所 大村幸弘先生
- ・ 平成23年度 東北地方太平洋沖地震被災文化財救援活動報告（1）
- ・ 被災文化財救援活動（2） 陸前高田市立博物館所蔵「拓本」掛軸安定化処理作業への支援協力
- ・ コラム 奥州市埋蔵文化財調査センター紹介
- ・ シンポジウム 「今、文化財が社会にできること」を開催して
- ・ JCP事務局通信
- ・ 書籍紹介『文化財の保存環境』『博物館資料保存論』



ブルーモスク



アヤソフィア



ボスボラス海峡



陸前高田市立博物館所蔵「拓本」掛軸安定化処理作業



奥州市埋蔵文化財調査センターから見た夕陽

トルコ・中央アナトリア世界遺産 スタディツアーハイライト

平成23年度の世界遺産スタディツアーハイライトは、トルコアナトリア地方を中心に企画しました。9月27日～10月4日の日程で、参加者は14名。催行するにはぎりぎりの人数でしたが、毎年楽しみにして下さる常連さんも多くなり、思い切って決行しました。

訪問地はアンカラ→サフランボル（世界遺産）→カマン・アナトリア考古学研究所、カレホユック遺跡、ヤッスホユック遺跡発掘現場→カッパドキア→イスタンブルアヤソフィア、ブルーモスク、地下宮殿、そしてトプカブ宮殿博物館など、盛りだくさんのメニュー。中でも特筆すべきは、トルコで20年以上も発掘調査を続けている大村幸弘先生ご夫妻をアナトリア考古学研究所に訪ねたことでしょう。大村先生は、発掘現場や研究所に地元の若者を受け入れ、雇用創出と人材育成の面で、多いに貢献しています。また、日本の若者もインターンとして、発掘に加わっています。

イスタンブルのトプカブ宮殿博物館では、学芸員のOmur Tufan氏にご案内頂き、ハーレムなどを説明付きで間近に見せて頂きました。博物館展示品の絢爛さもさることながら、庭園から望むボスボラス海峡、モスクの壁面を彩るタイル、エジプシャンバザールの雑貨の数々……何をかも鮮やかに美しく、とても色彩豊かな旅であったと思い



カッパドキア

ます。

しかし！！ 訪問先の多彩さに比して、食事のメニューが乏しく、アンケートではご不満の声を頂戴してしまいました。唯一の救いが、アナトリア考古学研究所で振舞っていただいた昼食です。本当に美味しかったです……、ありがとうございました！

世界三大料理を期待して参加してくださった皆様に改めてお詫び申し上げますと共に、次回は必ずリベンジを果たしたいと思います。

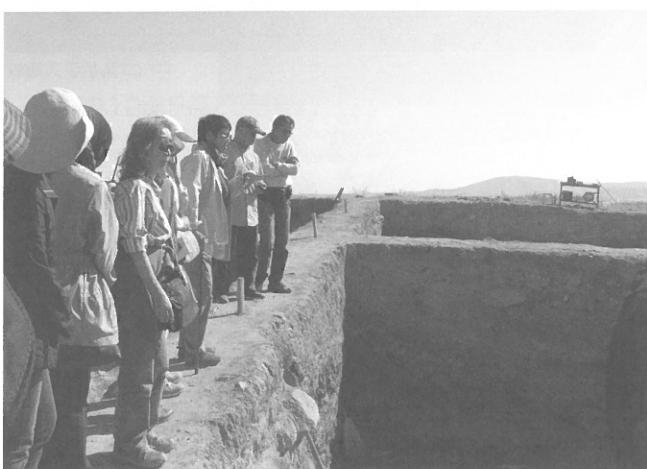
今回お世話になりました大村幸弘先生、奥様の正子様、そしてトプカブ宮殿博物館のOmur Tufan氏に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

トルコ・中央アナトリア世界遺産スタディツアーハイライトに参加して

飯野 香 (NPOJCP会員)

トルコ語では何と言うのか問い合わせた私への現地ガイドのオズギュルの答えは意外なものでした。曰く、「日本の漫画にもあります。」

その通り、だから私はここまで来たのかもしれません。ヒッタイトに興味をもったきっかけは、クズルウルマック、



発掘現場にて 右から3人目が大村正子先生

赤い河と呼ばれるその河のほとりの国を描いたその漫画でした。

ここはカマン。アナトリアの東西と南北を結ぶ道路が交差する場所。中央アナトリア地方スタディツアーハイライト3日め、一番楽しみにしていた中近東研究センター附属アナトリア考古学研究所です。研究所の裏手にある三笠宮記念庭園を登ると、はるかかなたにかすかに光って見えるのがクズルウルマックでした。

早朝アンマンを発ち、バスに乗ること2時間ほどでしょうか。途中のホテルで大村所長と合流し、ヤッスホユック遺跡、カマン・カレホユック遺跡の2箇所の発掘現場と研究所、博物館をご案内いただきました。

ヤッスホユック遺跡はアナトリア研究所から東に30キロくらい。10mほどの高さの丘の上にあります。この丘、山の上を削ったような上部の平らな面がかなり広い地形です。遺跡は500m×600mほどの広さがあることが地底探査の結果分かっているそうです。

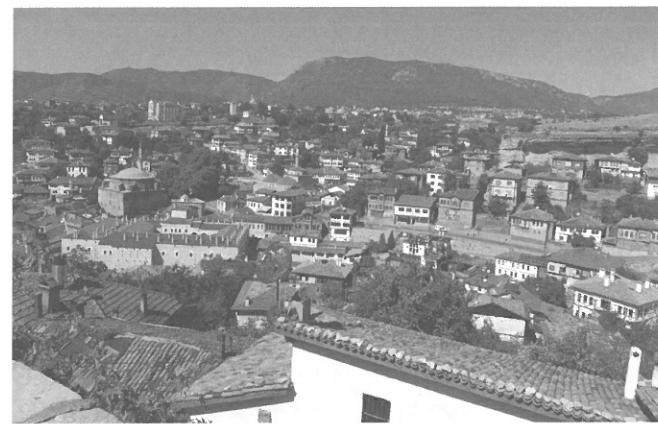
アナトリアはもう秋で草はすっかり枯れていますが、と

きどきかわいい花をつけていたりもします。焼畑は禁止されているそうですけど、ときおり煙や焼いた後と思しき畑も見かけます。ひまわり畑が多いので夏は迫力がありそうです。アナトリアの夏は乾期、10月中旬から雨が降るので、今年の発掘調査はそろそろ終了の時期とのこと。

遺跡ではクレーンで大きな石を運び出す作業の最中でした。3000年以上前に使われた石なんだと思うと不思議な感じです。タイルのモザイクのような分かりやすいものはありませんでしたが、焼けた跡がいかにもそれらしく残っているのに驚きました。

そしてカマン・カレホユック遺跡。アナトリア考古学研究所が掘りつづけている遺跡です。25年かけて前期青銅器時代の層まで掘り進めてきたのだそうです。もう今年の作業を終えた現場を覗くのが怖いくらいに深く掘られています。その歴史の深さにもクラクラします。

この他にスタディツアーで訪れたのは世界遺産のサフランボル市街、ギョレメ国立公園とカッパドキア、そしてイスタンブールの歴史地区でした。それぞれに思い出深い地



サフランボルの市街風景

となりましたが、中でもカマンは格別です。ゆったりとトルコの長い歴史に思いを馳せることのできた1日でした。企画いただいた事務局の皆様、ご対応いただいた大村所長はじめ現地の皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

トルコ・中央アナトリア世界遺産スタディツアーに参加して

濱田 寿美子

古い歴史のある異国情緒たっぷりの国、親日的、これが旅をする前のトルコへの漠然としたイメージでした。

今回の主な目的はアナトリア考古学研究所訪問。発掘現場のスケールの大きさや充実した施設に驚き、大村先生ご



チューリップのタイル

夫妻と職員の皆様の心のこもったおもてなしを受け感激しました。専門家の皆様の地道な努力が二つの国の友好と将来の発展に大きな役割を果たしているのでしょう。

東西の交易の拠点となる場所の宿命で、侵略の恐怖を感じつつも、国民性は穏やかで優しく、

有名な建物はどれも迫力がありますが、全体を覆うのは優しい光でした。文化



オリエンタルエクスプレス・イスタンブール駅舎を改造したレストランにて



が混在し融合し優しい色彩と柔らかな曲線美を作り上げていました。

その一方で市場はエネルギーで買い物も楽しく、交渉次第であっさり半額になり、勿論それでも商売は成立しているのですから人々の逞しい一面も垣間見ました。市場の雑貨と工房で丹念に作られる精緻なトルコ石のジュエリー、どちらも好きです。

サフランの香りやタイルに描かれたチューリップの色を記憶に留め、オリエント急行の始発終着点となるイスタンブールの壮麗な駅舎の佇まいに歴史の重さを感じ、それにも増して初めて出会ったトルコの人々の人懐っこさに心が解れました。

今回の旅は私にとって、専門家の皆様の後ろにくつついで解説を聞きながらの名所見学という贅沢な旅になりました。



エジプシャンバザールにて

アナトリア考古学研究所便り

大村 幸弘（アナトリア考古学研究所）

アナトリア考古学研究所・大村幸弘先生から、JCP事務局にお便り（メール）が届きました。

今まで経験をしたことも無かったような厳しい冬が過ぎ、アナトリア高原になんとか春がやってきました。カマンがマイナス30度になったのも25年ぶりです。

お陰様で、4月16日、第4次ビュクリュカレ遺跡発掘調査（隊長松村公仁アナトリア考古学研究所研究員）を開始しました。この遺跡はアナトリア考古学研究所の西約30キロ、クズルウルマック（赤い川）の側にある典型的なヒッタイト帝国時代の都市遺跡です。一昨年はこの遺跡から一枚の外交文書が見つかっており、今シーズンは文書庫の発見に焦点を合わせて調査を行っているところです。

エジプトのラムセス二世、三世と東地中海世界の霸権を常に争っていたヒッタイト帝国の遺跡ですので、都市構造も並のものではありません。数十トンの巨石を組み合わせた壁には驚いてしまいます。これだけ堅固な都市を建設したヒッタイト帝国が何故一瞬にして終焉を迎えたかが歴史の中でも謎とされています。それを解決するだけの糸口でも見出せたら嬉しい限りです。

30名ほどの労働者と一緒に作業を続けておりますが、ここ一週間で表土層を剥ぎ取り、第I層のオスマン時代の建築遺構の一部を取り外したところです。労働者も予備調査も含めて今年で5年目ですので、大分発掘にも慣れてきたようです。先日確認された建築遺構の直下から火災層とともにヒッタイトの遺物が数多くみつかってきております。おそらくこの火災層は、帝国時代に年代付けられるのではないかと思っております。

発掘調査は昨年より一ヶ月早めに開始しました。と言いますのは、4月のアナトリア高原は雨も時折ありますが、暑さはそれほどでもありません。とにかく事故も無く今シーズンも終わることが出来れば何よりです。

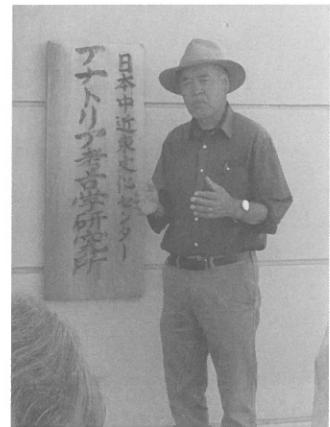
三笠宮記念庭園も4月に入ったと同時に来園者で賑わっています。ここ一週間は庭園の整備、特に池の清掃などを

行っているところです。日本から寄贈して頂いた錦鯉が元気に越冬したのが何よりでした。それと庭園のソメイヨシノも先々週末に満開になり多くのトルコの方々に喜んで頂きました。開花時期は日本の東北とほぼ同じです。

カマン・カレホユック考古学博物館の入館者が、昨年だけで6万人を超したことで、文化・観光省は今年の5月から入場料をとることで、すこしがっかりしました。小、中学生等、児童は無料です。入場料がいくら入ってもすべて本省に持って行かれますので博物館にはなんらメリットがあるわけではありません。大人が日本円で200円程度になるとの連絡が先日博物館の方へあったことです。これからも入館者に喜んで頂ける博物館になるよう研究所としてもお手伝いして行くつもりです。トルコ側もカマン・カレホユック考古学博物館に対しては何かと協力して下さっておりますので助かります。

考古学博物館には4月に入り、アダナのチュクオヴァ大学、来週にはヒティット大学等、大学の学生がバスを連ねて見学に来るようになったのが新しい傾向です。それと昨年の春先から本格的に開始した『女性の日』、『子どもの日』、『教師の日』等も今月末から本格的に始まりますので、我々もお手伝いしたいと思っております。先日、エーゲ海沿岸のマルマリスで全国の博物館が行っている発掘調査に関するシンポジウムがありました。その際にエルトゥール文化・観光大臣、ムラット考古局長もお出でになったことです。カマン・カレホユック考古学博物館のプナル学芸員も、15分間、博物館の活動について発表したところ大臣から高い評価を頂いたようです。会場で、大臣からカマンの活動は素晴らしい、とお褒めの言葉を頂いたと言ってプナル学芸員が電話をかけてきました。昨日、考古局長とお会いした際にもそのことが話題になりました。本当に嬉しい限りです。

アナトリア高原の初夏はまだ先なようです。早朝の寒さは厳しいものがありますが、日中は25度ほどまで気温が上昇します。忘れること無く今年も八百屋の店先には大量の苺が山積みに、そして実に無造作に置かれており初夏の近いことを教えてくれています。苺は不揃いで量売りです。1キロ、80円前後です。これが姿を消すと次ぎにサクランボが顔を出し始めると思います。そしてそれと同時に高原の緑色の小麦畑が一瞬にして黄金色になり、あっと言う間に真夏に入るはずです。



大村幸弘先生



カマン考古学博物館入り口にて記念撮影。前列右から3人目が大村先生

平成23年度

東北地方太平洋沖地震被災文化財救援活動報告

平成23年3月11日に発生した東北地方・太平洋沖地震（以下、東日本大震災と略）救援活動に際しては、暖かいご支援、ご協力をありがとうございました。ニュースレターNo.24に続きまして、活動記録を報告させて頂きます。

被災地への支援は24年度も継続して行います。引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

I.活動内容

I-①.陸前高田市立博物館 拓本安定化処置支援

陸前高田市立博物館の昭和53年度の館長 宗宮参次郎氏が県内の石碑の拓本を取って自ら表装した400件以上の軸装等資料は、オリジナルの石碑が流されてしまった今、非常に貴重なものとなっています。その多くは紙表装であり、津波被害により塩害とカビによる害を被っています。当初は掛軸の履歴を語るものとして表装ごと保存することも提案されましたが、限られた時間の中で本紙の救命を優先するという決断が下されました。この結果JCPの技術者には、表装を本紙から外し、塩分除去をして状態を安定化させるという作業が求められました。（本誌P.7、P.8「被災文化財救援活動（2）」参照）

I-②. 京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター 歴史遺産研究部門との共済事業 ～被災文化財救援プロジェクト（通称 ER プロジェクト）～

そもそものきっかけは、文化財レスキュー事業の中で一時保管するための応急処置が、5月の段階でフローしていたものを奈良文化財研究所が引き受けた事と、装丁のある被災文化財をどうするのか、という事が出発点でした。

今回の被災文化財の処置は、津波による＝潮水（塩分と泥）の除去・乾燥処置をカビを発生させる前（実際には既に発しているものも多かった）に終わらせることが目的でした。特に真空凍結乾燥ができない書画類（絵具で描かれていたり、装丁があったりするもの）に関しては、手作業でそれらの処置を行わなければなりません。特にこういった処置には経験と技術が要求され、場所と人手（学生）は大学側で、作業を主導する技術者は JCP 所属の専門家という発想でした。

II.活動経費について

II-①. 募金活動について

上記に記したとおり、募金活動を2011年4月21日から開始しました。募金のお願いに際しては、個人一口3,000円、法人一口30,000円として、振込み料無料の郵便振替用紙とともに会員に郵送しました。また10月に開催された谷中地区のお祭り「芸工展」や、2012年1月に開催したシンポジウムでは、会場に募金箱を設置しました。この結果予想以

上の寄附が集まり、2012年3月現在3,108,199円となりました（現在も少しづつ募金は集まり続けています。2012年度も引き続き募金活動を行う予定です）。

II-②. 募金の使途について

■郵送費

募金以外に会員からペーパータオル、和紙、マスク、保存用紙、梱包材などの修復用資材の提供を受けた。これらを必要と思われる現地団体へ郵送した。

■資材購入費

会員から提供された資材以外にも、エタノール、ドライウェル、刷毛などの要請があったため、購入して各団体へ郵送した。

■旅 費

救援委員会からの支援を受けるまで、専門家派遣の交通費、日当を支出した。

また、ERプロジェクトでは、ボランティアの旅費を支出した。

■ボランティア保険

ボランティア活動に参加してもらう際、法人負担で保険に加入の手続きを取っている。手続き自体も基本的に事務局で行っている。

■技術料として

拓本安定化処置のボランティア募集に際しては、5年以

震災寄付

	件 数	金 額
個 人	151	2,346,800
法 人	15	750,000
募金箱		11,399
合 計		3,108,199

被災文化財等救援関係等支出

費 项	摘 要	金 額
救援ボランティア技術料	奥州市埋文センター文化財救援ボランティア	1,100,000
調査謝金	技術者派遣	120,000
交際費	奥州市埋文センター等訪問、手土産	11,848
支払手数料	寄付等払込料金負担	36,662
支援物資費	道具、梱包用品、日用品等	152,044
通信費	物資の発送等	40,215
保険料	ボランティア保険	9,200
旅費交通費	ボランティア旅費	355,412
外注費	HP災害ページ設置	70,000
事務経費		360,000
合 計		2,185,381
	収支差額	852,818

上の経験を有することを条件とした。また、作業が長期に渡ることから、工房の主宰者、あるいはフリーの技術者など、時間的に融通の利く会員にお願いした。しかし技術者にとって1日仕事を休むということは、1日分の減収に直結する。このためJCPでは、できる限りの負担軽減を検討し、1日10,000円の技術料を支払うことを決定した。技術料としては充分ではないが、募金から支出するには精一杯であった。なお、何らかの機関に所属し、給与の形で補償されている会員に関しては、受け取りを辞退してもらった。

■その他

地震発生直後の現地入りできない時点では、ウェブ上で情報発信の重要性を痛感した。このため、既存のHPに被災関連頁を増設し、状況に応じた応急処置の方法や、現地で活動している各団体からの要請、ボランティア募集情報をアップできるようにした。

III. 現在の状況

陸前高田市立博物館 拓本安定化処置支援では、3ヶ月（1クール2週間）にわたって平均5名／1日の技術者を、作業場所となった奥州埋蔵文化財調査センターに派遣しました。東京国立博物館保存修復課アソシエイトフェローの指導の下、自然と役割分担がなされ、長期間にも関わらず良好なチームワークが保たれたのは、メンバーの高い協調性に依るところが大きかったと思います。作業は予想以上のペースで進み、3クール終了時にはほぼ90%の安定化処置が完了しています。

ERプロジェクトで当初引き受けた被災文化財は、屏風3
双3隻、額3面、襖8面、掛軸未表装を含むもの200点余り、
古写真100点、ガラス乾板500点等でしたが、おかげさまで、
昨年度で水洗応急処置はほぼ目処がつきました。今年度は
これらを所有者に返却できる様に裏打ちなどの処置を行う
予定です。

また、カビが生えるのを食い止めるために緊急で潮水（塩水+泥）をかぶったまま真空凍結乾燥処置を行った古文書、近代資料などコンテナ40杯ほど（総数はカウントできていません）を追加で預かっています。真空凍結乾燥に

よってカビの被害は食い止められましたが、塩水や泥を落とさなければ今後長期に保存していくできません。もう一度、水洗処置をして乾燥し直す必要があります。今年度からはこの処置を行っていきます。引き続きご協力をお願い申し上げます。

IV. 今後に向けて

今回の震災では、発生直後より会員からボランティアを志願する声がたくさん寄せられました。その声を十全に活かしかされたかというと、忸怩たる思いにとらわれます。今後の課題は、会員の意志と、マンパワーを必要としている現場をマッチングさせる方法を確立していくことだと思います。組織内で即戦力になるボランティアリーダーを養成することや体制整備はもとより必要なことですが、外部とのネットワークを構築し、災害が起きた時には双方向の情報交換を行える関係を築くことが課題と認識しています。

附. 活動參加者延べ人数

陸前高田市立博物館被災文化財救援活動 延べ168名
ERプロジェクト（2011年5月6日～2012年5月20日）
延べ43名

附. 陸前高田市立博物館所蔵「拓本」安定化処置活動記録
2011年

12月01日～	東京国立博物館 神庭信幸先生、同館アソシエイトフェローと共に、JCP事務局員が水沢市奥州埋蔵文化財センターを下見。12月からの陸前高田市立博物館拓本掛軸の塩分除去と安定化処置作業に向けて計画を建てる。
12月14日～	第一次拓本掛軸の塩分除去と安定化処置作業
26日	参加技術者（登録会員）は9名。延べ人数60名。
2012年	
1月10日～	第二次拓本掛軸の塩分除去と安定化処置作業
23日	参加技術者（登録会員）は6名。延べ人数55名。
2月	第三次拓本掛軸の塩分除去と安定化処置作業 参加技術者（登録会員）は7名。延べ人数48名。



被災文化財救援活動（2）

陸前高田市立博物館所蔵 「拓本」掛軸安定化処置作業への支援協力

岩手県陸前高田市立博物館は、2011年3月11日に発生した地震と津波により、1名を残して職員全員が亡くなるという悲劇に見舞われました。

JCPでは、昨年6月から、救援委員会（東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会）の要請を受け、東京国立博物館保存修復課の指導監督の下、救援された所蔵品の調査に当たるなど、支援を続けています。（ニュースレターNo.24『岩手県陸前高田市立博物館被災資料救援活動 参加報告』参照）。

被災資料の中でも、昭和53年度の館長 宗宮参次郎氏が、県内の石碑の拓本を取って自ら表装した400件以上の軸装等資料は、オリジナルの石碑が流されてしまった今、非常に貴重なものとなっています。岩手県教育委員会では、これら軸装の塩分除去と安定化処置を図るべく、水沢市内にある奥州埋蔵文化財調査センターに運び、12月から東京国立博物館保存修復課とJCPの会員ボランティアが協働して処置に当たることになりました。

掛け軸の多くは紙表装であり、津波被害により塩害とカビによる害を被っています。当初は掛け軸の履歴を語るものとして表装ごと保存することも提案されましたが、限られた時間の中で本紙の救命を優先するため、本紙を表装から外すという決断が下されました。この結果、JCPには十分な経験と技術を持った技術者が求められました。そこで、4年以上の経験をもつという条件で有償ボランティアとしての技術者を募集したところ、12名に上る技術者がエンブリーチしてくれました。

JCPでは、3クール（1クール2週間）にわたって平均5名／日の技術者を、作業場所となった奥州埋蔵文化財調査センターに派遣しました。東京国立博物館保存修復課アソシエイトフェローの指導の下、自然と役割分担がなされ、長期間にも関わらず良好なチームワークが保たれたのは、メンバーの高い協調性に依るところが大きかったと思います。作業は予想以上のペースで進み、3クール終了時にはほぼ90%の安定化処置が完了しています。

今回は、拓本安定化処置作業に従事して頂いた会員の中から、2名の技術者にご寄稿頂きました。



陸前高田市立博物館所蔵「拓本」掛軸安定化処理作業を行うJCPメンバー（左から日野さん、脇屋さん、佐藤さん、吉原さん）と東京国立博物館の鈴木さん（右端）

「岩手レスキューに参加して」

吉原光洋（NPO JCP登録会員）

昨年の12月、今年の1月2月と各2週間づつ、3期に分けて行われた、被災した文化財のレスキュー作業に参加した感想を記したいと思います。

私自身にとっても、忘れられない出来事となりました。



作業を行う吉原光洋さん

このプロジェクトは、国が行っている東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会（通称；レスキュー委員会事務局：東京文化財研究所内）の要請を受けて、東京国立博物館保存修復課とNPO法人文化財保存支援機構の協力で行われました。

そこで昨年12月にJCPのメールマガジンでボランティア募集の広報が掲載され、応募したところ、私にも声がかかりました。

当時の現場状況は、陸前高田市立博物館に隣接した「海と貝のミュージアム」が壊滅状態で、10万点の標本、15万点の作品を全て失うというものでした。

陸前高田市では、人口の10%に当たる23,000人が亡くなられたということです。

今回の作業の目的は、救援された掛け軸をとりあえず長期保存出来る状態にまで持っていくことでした（長期安定化処理）。

海水や汚泥に晒された作品の洗浄です。これに関しては、基本的には所蔵者側の考えが優先されるべきものでしょう。専門家も交え様々な意見が交わされた結果、11月秋に「本紙を守る」考えが決定されたと聞いています。

作業内容については、通常をはるかに超える損傷した作品たちがいくつもの段ボール箱の中にぎっしりと詰まっていました。当初、三百数十点と聞いていた作品は、最終的には五百点に近い数になりました。

今回お会い出来なかった方もおられます、簡単にメンバー紹介をしたいと思います。

メンバーの年齢層は、20代から60代まで幅広い層が集結しました。

- ・アイデアが湧き水のごとく次々と出てくる60代のS氏。
- ・自衛隊経験者で特殊訓練で200名以上の中で最後の8名に残ったW氏
- ・イタリアのトスカーナ州公認修復士の免許を持つH氏
- ・東博からは、紙本修復師のH女史、N女史、韓国国籍を

持つS女史。
・そして新潟から来た私、
　以上が1週間以上の長期メンバーでした。

短期でお会い出来なかった方もおられましたが、いつかどこかでお会いできることを楽しみにしています。

また、様々な個性あるメンバーを気遣いながらまとめてくださった東博の誇るコンサバーターのS氏、大変有り難うございました。

以上のメンバーで、良い意味で刺激のある会話がかわされました。

一部をお話ししますと……。

多くの作品の中には水分を入れると収縮度の大変大きい作品もあり、予定していた手法をその場で変更しなければならない場面も出てきました。そんな時、一番良かった点は、作品を目の前にしながらの意見交換することで、作品に対しての対応が具体的でスピーディーに行われた事でした。

その日に起きた出来事（良い事例、悪い事例などすべて）をその日のうちに（休憩時間、食事をしている時間など）全員が共有することが出来ました。またそれによって、世代間で出来てしまう価値観の違い、言葉の感覚の違いなどをかなり埋めることができのではないかと感じています。

結果的に、職人の世界では余り聞くことができなかつた言葉なのですが、「チーム力」を築くことが出来たのではないかでしょうか。

余談になりますが、水沢の飲食店の方々とも親しい交流をさせただいただき、大変楽しい時間を過ごすことが出来ました。新潟と同じくらい美味しい、新鮮なお料理をいただきました。

詳しくは知らないのですが、地元の女性と恋に落ちそうになったメンバーもいたとかいないとか。

私個人といたしましては、第3期を離れるときにはホッとした充実感と寂しい感情が大変心地よかったです。ちょっとしたトラブルで、「奥州ボタン事件」という出来事もありましたがそれは紙面の都合上割愛させて頂きます。

また、奥州市埋蔵文化財調査センターの方々には細やかな心遣いなど、大変よくしていただき、この場をお借りしましてお礼を申し上げます。

最後に、作業の拠点を水沢周辺においた理由として、未だに完全には再生されていない交通面、冬季のため移動など考慮したと聞いています。そして何より、現場から安全な場所へ移動し作業をすること。「人、モノにとって安全な環境づくり」＝「保存修理へ」ということに腐心されたK博士初め、事務局の方々には本当に感謝いたします。私個人的には、「新素材との出会い」「チーム力」「環境と人」「科学者の数字と職人の感覚の融合」「解体技法」など様々なおみやげを頂き言葉では語り尽くせないほどです。

災害は無いことを祈りますが、このようなプロジェクトがあれば是非参加させていただきたいと思います。現地の心温かい歓迎、新しい出会いに感謝いたします。

岩手県陸前高田市立博物館所蔵 被災文化財救援活動に参加して

平野はな子（NPO JCP登録会員）

昨年12月より、岩手県陸前高田市立博物館所蔵被災文化財の保存処置作業に携わり、今年にかけての3期間にわたってレスキュー活動に参加しましたので、ご報告させて頂きます。

現地、岩手県奥州市内の施設で行なわれた被災文化財救援活動は、東日本大震災の津波で被災した拓本掛け軸を保存処置することが主な作業内容で、東京国立博物館保存修復課の指導の下、装こう、紙資料を専門とするJCP会員の修復技術者の皆さんのが集まり、ローテーションを組んでの活動となりました。

処置対象であった文化財は、地元の石碑の拓本が掛け軸に仕立てられたものなど、郷土に根付いた貴重な資料が多く、寸法や材質などは様々で、中には新聞紙に包まれた状態のまくりも含まれていました。損傷状態は、海水による汚れやしみの他、表装紙の色移りや黒痕、砂や泥の付着、破れ、表装の糊離れがあるものが大多数であったため、保存処置の工程として、本紙を表装からはずした後、脱塩処置を施してプレス乾燥させ、保管することを目標に進められました。しかしながら各資料によって症状は異なり、処置の難易度も様々であることから、作業の優先順位を決めた上で、処置前の状態観察記録と撮影、登録番号の確認をし、処置後の管理が容易にできるように作業を行いました。

また、処置にあたっては、限られた材料や場所、時間を駆使しての作業でしたので、修復技術者がそれぞれの専門分野の知識や経験を活かしながら、いかに効率よく、かつ適切に大量の資料を保存処置していくかについて十分に話し合い、試行錯誤が重ねられました。このため、年齢や性別を問わず、異なる分野や環境で活躍する修復技術者が、一つの目的に向かって知恵を出し合いながら作業に取組む稀な機会となったことにより、活発な意見交換がされ、最善の方法での処置を行なうことができたのではないかと思います。

今回の文化財救援活動では、修復技術者間の輪の広がりや知識の共有ができたばかりではなく、作業場所でお世話になった埋蔵文化財調査センターの職員の方々とも交流を深めることができました。作業を行なった時期は寒さも厳しい雪降る季節でしたが、その中で感じた人と人との繋がりの大切さや温かさは掛け替えの無いものでした。また、この救援活動がたくさんの方々の働きや協力、ご支援の下に成り立って実現したことに感謝し、今回の経験を今後の活動に活かしていきたいと思っております。



平野はな子さん



奥州市埋蔵文化財調査センター紹介



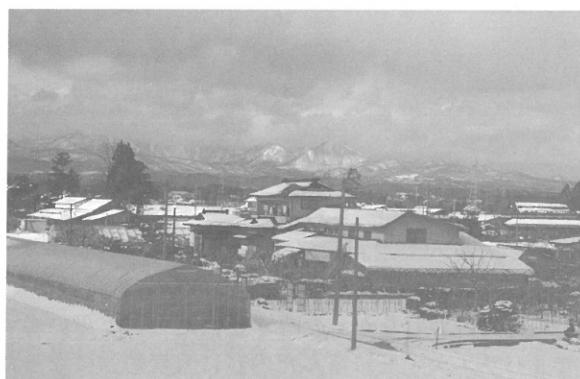
奥州市埋蔵文化財調査センター正面入り口

今回陸前高田市立博物館の拓本掛軸安定化処置を行った奥州市埋蔵文化財調査センターは、東北本線水沢駅から車で10分ほど、国指定史跡胆沢城の外郭南門地区に隣接して建てられています。ご存じの方も多いと思いますが、胆沢城は延暦21年（802年）に坂上田村麻呂によって造られた古代城柵官衙で、大同3年（808年）に鎮守府が多賀城から胆沢城に移され、鎮守府胆沢城となりました※。センターの正面入り口の柱は、この胆沢城の正門を模して作られています。

ところで皆様「アテルイ」ってご存じですか？ 大和朝廷に服従することを潔しとせず、抵抗を続けた蝦夷のリーダーにしてヒーロー、この地では今でも子供に大人気です。最後は征夷大将軍坂上田村麻呂に降伏して京都へ送られるのですが、田村麻呂の助命嘆願もむなしく、盟友のモレと共に処刑されてしまいました。アテルイとは、きっと田村麻呂も惚れ込む人物だったのでしょう。恥ずかしながら私も水沢に来て初めて彼を知ったのですが、日本各地にはこのような知られざるヒーローが、まだまだたくさん居るに違いありません。今回センターにお邪魔したことで、蝦夷の魅力を再認識することができたのは、大きな収穫でした。

同センターには、胆沢城跡以外にも、杉の堂遺跡、熊野堂遺跡などの発掘現場から出土した土器が、作業室に所狭しと並べられていました。中には思わず手に取ってみたくなるような、芸術的で美しい縄文式土器もありました。東北地方の文化の奥深さに、改めて瞠目する思いでした。

同センターは展示室も備え、アテルイや胆沢城についての情報、発掘された考古資料などを数多く展示しています。また勾玉作り、土鈴作りなどのワークショップも積極的に展開し、子供も大人も楽しめる文化発



埋蔵文化財調査センターの窓から望む奥羽山脈



アニメ アテルイ
(水沢市埋蔵文化財調査センター所報「鎮守府胆沢城」第42報 平成12年11月20日発行より)

信拠点として、地域で重要な役割を果たしています。皆様も岩手へお出かけの節は、ちょっと足を延ばして訪ねてみませんか？

今回の拓本安定化作業では、作業室の貴重なスペースを提供して頂きました。職員の皆様にはご迷惑な面も多々あったかと思いますが、大変親切に接してください、お昼や休憩時間などにも楽しくお話をさせて頂いて、とても快適に作業が進められました。ここに改めまして御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

奥州市埋蔵文化財調査センター：

〒023-0003

岩手県奥州市水沢区佐倉河字九蔵田96番地1

TEL：0197（22）4400

FAX：0197（22）4600

開館時間：9:00～16:30（入館16:00まで）

休館日：毎週火曜日 年末年始（12月29日～1月3日）

入館料：大人；200円／高校生以下；無料／

団体15名以上；100円

※参考：同センターホームページ：

<http://www.oshu-bunka.or.jp/maibun/index.htm>

〈文責：事務局 八木〉

シンポジウム

「今、文化財が社会にできること」を開催して

原 祐一（東京大学埋蔵文化財調査室）

今回のシンポジウムは運営委員、発表者として参加しました。主催者の意図が一方通行にならないために参加者にアンケートの記入をお願いしました。アンケートの意見の中には「発表内容がテーマに沿っているか疑問」「パネルディスカッションは期待外れ」「議論になっていなかった」という厳しい意見がありました。シンポジウムに至るまで議論が十分に行われなかった事が要因だったと思います。一方で「バラエティーに富んだ内容に大変勉強になった」という意見もありました。私としては金野氏の大船渡市で被災した個人所蔵資料の救済についての講演、他の講演者の講演から、被災地でもない東京で業務としてこなしてきた自分の仕事をどう位置付ければよいか、今後どう取り組んで行けばよいかを考える機会になりました。回答者からは、文化財に関わっている参加者、そうでない一般の参加者それぞれの立場からどのように「文化財とどう付き合って行けばよいか考える機会となった」という内容の意見が寄せられました。問題提起はできたのではないでしょうか。

私の発表で小石川植物園を守る会の稻葉信子氏に登壇していただき、小石川植物園敷地外周部分の道路拡張工事で生じる植物園内での保存してきた自然環境の破壊、拡張工事後生じる恐れがある交通問題と住宅問題について話していました。私の所属する埋蔵文化財調査室は、植物園の遺跡調査に関わっています。遺跡調査は文化財保護法に則った「記録保存」作業で、遺跡の現地保存・活用されるのはまれで、ほとんどの場合建築のための遺跡破壊を前提としています。考古学は法律上、都市開発を進めるために無視できないはずなのですが調査後の遺跡保存、工事と遺跡調査後の開発にはほとんど口を挟めません。シンポジウムのテーマ「今、文化財が社会にできること」の文化財には考古学も含まれます。考古学にとって「社会」は何であるのか、現在のところ守る会の要望に対して考古学は何も回答していませんし何も出来ません。考古学は社会とどうかかわるのかを守る会から突き付けられたと思います。

今回のシンポジウムは来年度以降になります。東北の復



原祐一さん

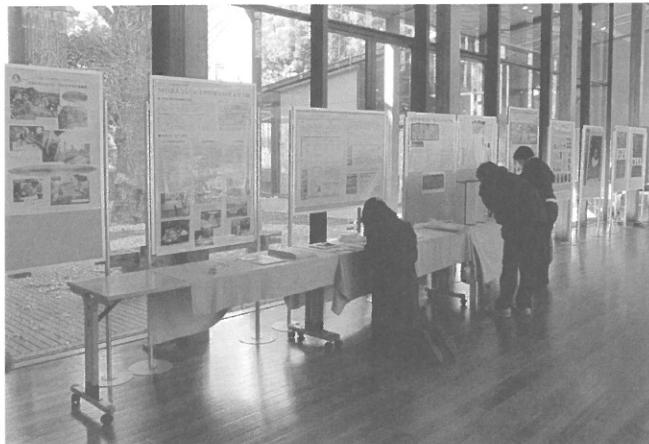
興も進んでいるでしょうし、パネルディスカッションで議論になりかけた「ボランティア問題」も光明が見えているかもしれません。今回のシンポジウムをきっかけに参加者はそれぞれの立場で文化財に関わっているでしょうから、次回は客席から議論に加わっていただける機会を設けたいと思います。寄せられた激励・期待・要望に答えなければいけません。



パネルディスカッション



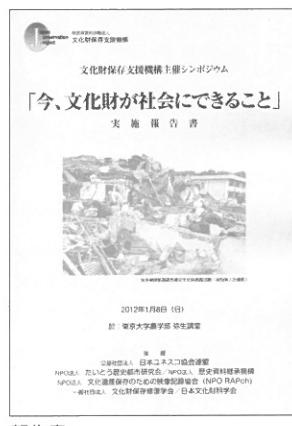
史跡見学会



ポスター会場風景

なお、3月15日にシンポジウムの要旨集にパネルディスカッション、ポスター展示の原稿、アンケート結果等を加えたシンポジウムの実施報告書を刊行しました。

1部700円で販売しています。詳しくはJCP事務局にお問い合わせください。



報告書

「文化財保存修復専門家養成実践セミナー」

受講生募集のご案内

今年度のセミナーは、下記日程にて行います。

【レベルⅠ】

期間：平成24年8月25日（土）、26日（日）、27日（月）、
28日（火）、29日（水）、31日（金）、9月1日（土）、
2日（日）、3日（月）、4日（火）〈全10日間〉

場所：東京国立博物館小講堂

レベルⅠは、前年度受講生を優先しますが、新規応募者も若干名受け入れます。

ご希望の方は、下記事務局まで資料を請求してください。

【レベルⅡ】

期間：平成24年7月30日（月）、31日（火）、8月1日（水）、
2日（木）、3日（金）、4日（土）、6日（月）

〈全7日間〉

場所：旧生出小学校（陸前高田市立博物館・海と貝のミュージアム仮収蔵施設）

書・籍・紹・介

『文化財の保存環境』

『博物館資料保存論』



編 者 東京文化財研究所
2011年11月20日 発行
中央公論美術出版
定価 1,900円 + tax
170ページ（オールカラー）
A5判



編 者 石崎 武志
2012年3月30日 発行
株式会社 講談社
定価 2,200円 + tax
172ページ
A5判

本年度より学芸員資格は新たなカリキュラムとなり、博物館資料保存論2単位が必要科目となりました。その新カリキュラムに対応した教科書または副読本として、これらの2冊が刊行されました。

「博物館資料保存論」の内容は、博物館における資料保存の意義、資料の保全、博物館資料の保存環境、環境保護と博物館の役割等が挙げられます。

『文化財の保存環境』は東京文化財研究所（以下東文研）、

レベルⅡは、基本的にレベルⅠの修了生を対象としますが、今年度に限り1か年のみ終了した人も対象とします。ただし、今年度8月から行われるレベルⅠを受講することを前提とします。

また、被災県（岩手県、宮城県、福島県、茨城県、栃木県）の文化財保存従事者は、レベルⅠを受講していなくても参加可能です。ただし修了証書の対象とはなりません。詳しくは、本部事務局までお問い合わせ下さい。

問合せ先：〒110-0008 台東区池之端4-14-8

ビューハイツ池之端102号

NPO法人 文化財保存支援機構 本部事務局

TEL：03-3821-3264／FAX：03-3821-3265

E-Mail：jimukyoku@jcnpnpo.org

「世界遺産スタディツアー」のご案内

今年の世界遺産スタディツアーは、中国西安・洛陽です。

日程は、10月18日（木）から23日（火）の予定です。

『博物館資料保存論』は石崎武志先生の編ではありますが、石崎先生は東文研の副所長を勤められているので、これらは東文研が新カリキュラムに対して方向性を示したものと考えていいと思います。

『文化財の保存環境』は文化財全般に渡る保存環境について語られています。オールカラーで図版類も多く、副読本としての作りで入門用としても最適な本です。屋外の文化財に関する記述もあり、館内だけに留まりません。

『博物館資料保存論』は「博物館」という箱の中での専門的な内容となっています。どちらかと言えば教科書としての本造りとなっています。

どちらもできるだけ図版を使用し、専門用語には解説を加えるなど、分かりやすい編集がなされています。

今まで、このように各方面の資料保存について、まとめられた本は多くはありません。この2冊によってそれらを見直してみるといい機会になると思います。

これから学芸員資格取得を目指す人たちにとっては必読の本ですが、既に資格を有する人や修復技術者たちにも必要な本だといえます。なぜなら、これは単に学芸員資格のカリキュラムが変わったと言うことだけではなく、博物館の保存がこの方向性に従って進められると思われるからです。保存についてしっかり理解しておくことで、今後の仕事の役に立つものになると思います。

また、どうしても自分の専門以外の部分は読み飛ばしがちです。それらの中には、「今更恥ずかしくて聞けない」といったものがかなりあると思います。意外とこの2冊には、それらのことが書かれています。密かに学び直すいい機会かも知れません。

どちらか1冊でいいと思いますので、一読の価値のある本だと思います。

(R.S)

ご入会ありがとうございました。

(平成24年5月25日現在入会者数)

■理事	8名	■維持会員	16名
■登録会員	171名	■一般会員	109名
■学生会員	54名		
■監事	1名		
■評議員	3名		
■賛助会員	31件		
株式会社	宇佐美松鶴堂		
株式会社	宇佐美修徳堂		
株式会社	岡墨光堂		
株式会社	絵画保存研究所		
株式会社	桂文化財修理工房		
財団法人	元興寺文化財研究所		
京都造形芸術大学	日本庭園・歴史遺産研究センター		
共和コンクリート工業株式会社			
国富株式会社	長崎営業所		
株式会社	芸匠		
株式会社	光影堂		
一般社団法人	国宝修理装こう師連盟		
株式会社	坂田墨珠堂		
株式会社	修護		
株式会社	修美		
株式会社	松鶴堂		
宗教法人	正法院		
中部資材株式会社			
株式会社	東都文化財保存研究所		
日本通運株式会社	美術品事業部		
株式会社	半田九清堂		
長谷川 聰			
百元 節			
株式会社	フレンドトラベル		
株式会社	文化財修復技術研究所		
株式会社	文化財保存		
山領絵画修复工房			
他 個人4名			
(アイウエオ順)			

NPO JCPの活動に 参加してみませんか？

■登録会員：年会費 7,000円
文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。
登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

■一般会員：年会費 5,000円
この法人の目的に賛同し、支援する個人。

■賛助会員：年会費 一口50,000円
この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

■学生会員：年会費 3,000円
大学または大学院に相当もしくは準じる教育機関の学籍を持ち、この法人の目的に賛同して入会する個人。

会員特典
・季刊情報誌の送付
・講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL. 03-3821-3264 FAX. 03-3821-3265

E-mail : jimukyoku@jcnpnpo.org

URL : www.jcnpnpo.org

※現在JCPでは、東北地方その他の被災文化財救援募金を受け付けております。

ご連絡いただければ、振込み料無料の振込用紙をお送りいたします。

皆様の暖かいご支援を、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

※この他にも、隨時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用ください。

・郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

・三菱東京UFJ銀行 四谷三丁目支店

普通預金 3960340

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

理事 三輪嘉六

・みずほ銀行 根津支店

普通預金 1727893

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

NPO JCP NEWS

第25号

2012年5月25日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒110-0008

台東区池之端4-14-8 ビューハイツ池之端102号

TEL : 03-3821-3264 FAX : 03-3821-3265

E-mail: jimukyoku@jcnpnpo.org

URL: www.jcnpnpo.org

関西支部

京都造形芸術大学

日本庭園・歴史遺産研究センター内

TEL : 075-791-8519

〈理事〉

三輪嘉六（理事長）

大林賢太郎（副理事長） 西浦忠輝（副理事長）

増澤文武 沢田正昭 増田勝彦

三浦定俊 山領まり

〈評議員〉

田邊三郎助 荒木伸介 伊原恵司

〈本部事務局〉

八木三香（事務局長） 松本洋子

〈関西支部事務局〉

伊達仁美（事務局長） 加藤亜沙子

〈編集協力〉

嶋根隆一（伝世舎）